

# 附編 蓮乗院廟の霊屋建築について

鶴岡典慶

## 一 はじめに

蓮乗院廟は、発掘調査によって明らかとなった地下埋蔵物とともに、上屋構造物である霊屋においても、建立後全く手が加わることなく今日まで残されてきた貴重な遺構であった。しかし正面扉の欠失をはじめ、屋根板落下や全体的な石材の劣化等、非常に破損の甚だしい状態となっており、また廟の近傍にまで一般墓地が迫り現地での良好な保存環境を保持することが困難な状況となっていた。そこで所有者によって種々検討された結果、文化的価値に鑑み、建物を一旦解体し、境内の環境の良い場所に移築する保存修復工事が実施されることとなった。本稿では、この工事によって明らかとなった蓮乗院霊屋の構造や工法等について報告する。

## 二 構造及び形式

蓮乗院霊屋は先述のとおり、松平秀康の正室であった鶴子（蓮乗

院）の霊屋として、元和七年（一六二一）の没後間もない頃に建立されたものと考えられる。本満寺境内の北東部にある墓地内に西面し、壇正積基壇上に桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、石板葺の霊屋が建つ。材料は、すべて越前産の笏谷石が用いられ、柱・長押等の建築部材や内部壁面を飾る仏像彫刻が造り出しによって製作されている。以下に構造及び形式について各部位毎に詳述する。

### 基壇

地表面に地覆を敷き廻し、その上に壇正積基壇が設けられていた。基壇地覆石は正背面をそれぞれ一枚の石で通し、側面石はその間に挟み込む形で敷かれていた。東及び羽目石は各面一石で造り出して組まれ、正背面石は中央束とその左右の羽目石、側面石には中央束・左右羽目石と隅東石までを造り出し、正背面両端の羽目石が隅東石に嵌め込まれるようになっていた。また羽目石には格狭間が彫刻されている。石の仕口（接合部）には、上端から鉄鏝（修復後はステンレス製に変更）が打たれていた。葛石は基壇上面と一体で、巾広の板石が梁間方向に四列配され、上面後方寄りに霊屋本体が載る。

最前列の板石には中央付近に供物膳（欠損大）が造り出しで取り付き、その両脇には供花用の孔が穿たれていた。

なお、基壇内部は空洞であったが、葛石及び羽目石等の劣化が大きかったことに加え、上部霊屋本体の重量を今後長期的に支えていくには、構造的に厳しいと判断したため、空洞部にステンレス製の枠を組み葛石を支持するとともに、羽目石上部と枠をステンレス製プレートで緊結し補強した。

#### 霊屋本体軸部

軸部は、桁行一間、梁間一間で、正面中央に両開扉を開く（ただし扉は失われていたため、今回整備で復旧）。地長押、内法長押を廻し、柱上で桁を受けていた。

正面は、両脇壁から隅柱を含む側面壁の一部までと、地長押から内法長押までを一体で造り出し、中央扉下部の地長押から敷居までの造り出し石を挟んで組み、扉上部の小壁石を落とし込んでいた。小壁中央には肘木を伏せた上に斗が載るような組物風の彫刻が刻まれ、その両脇面には唐草文様彩色が施されていた。

側面及び背面は、地長押から柱上部まで一体で造り出し、背面隅柱は側面壁側に造り出していた。側面壁は二枚合わせ、背面壁は三枚合わせで生まれ、内部壁面には釈迦像が浮彫されていた。

#### 妻飾り・軒廻り

妻壁は一石造り出しで、棟木受け臺股や両脇の天女が浮彫され、彫刻面には彩色が施されていた。

桁は下端に決り溝が彫られ、軸部の壁板上部を大入れとして落と

し込まれていた。

棟木は一本の石材であるが、屋根板を止めるために、上面から内削りが施され木材が挿入されていた。なお、木材は雨水等の浸入により腐朽が甚だしく、構造的役割は果たしていなかった。そこで今回の工事では、内削り部に鋼板を挿入し屋根板と緊結して支持することとした。

#### 屋根

屋根板は、正背面とも目地造り出しの流し板五枚で葺かれ、棟飾り石下部付近で孔を開け棟木に釘止めとしていた。両端隅の軒先には反り増しを設けていた。

棟飾り石は中央で相欠継ぎとし、両端上端に反り増しをつけていた。

### 三 考 察

蓮乗院霊屋は比較的小規模ではあるが、壇正積基壇を据え、横長の方一間柱間に地長押と内法長押を廻して軸部を組み、妻飾や組物を設けて桁や棟木を受けるなど、建築的に概ね整った形式で造られている。桁や棟木が建物全体のバランスに比してかなり大きいのが、これは屋根板を止めるために木材を埋め込む必要があったことからやむを得ないと思われる。

技法面で見ると、石組や造出し等の加工技術は高度で、内部壁面の仏像や妻飾の彫刻にも精緻な技巧が施されている。また屋根板は、見えかかり面を目地の重なり部分より薄くして、軒先の重厚感を避

けるように配慮して加工されている。棟木と桁を除けば、造り出しの柱や長押の木割も細く、石造でありながら、瀟洒な雰囲気を感じさせる。

なお、欠失した扉の軸受部は上下とも破損が大きかった。この扉は通常、開閉がほとんど行われないであろうと考えられるので、扉を取り外すために意図的に破壊したようにも見受けられた。内部壁面の仏像彫刻や彩色状況から見ても、扉にも相当の装飾が施されていたものと想像でき、霊屋部材の残存状況が良かっただけに亡失が惜しまれる。

#### 四 おわりに

京都府内には、高台寺霊屋〔慶長十年（一六〇五）建立、重要文化財〕、祥雲院殿霊屋〔天正一九年（一五九二）建立、京都府指定有形文化財〕、芳春院内霊屋〔瑞龍院霊屋・慶長十九年頃（一六一四頃）建立、芳春院霊屋・元和三年頃（一六一七頃）建立、いずれも京都府指定有形文化財〕をはじめ多くの霊屋遺構が残るが、ほとんどは木造建築であり、蓮乗院霊屋のように石造でつくられたものは少ない。なお、夫であった秀康及び同母の霊屋〔慶長十二年（一六〇七）及び慶長九年（一六〇四）建立、いずれも重要文化財〕が和歌山県の高野山にあり、規模や形式は異なるものの、蓮乗院霊屋と同じ越前産の笏谷石を使用していることや柱等の造出し加工など多くの共通点が見られる。

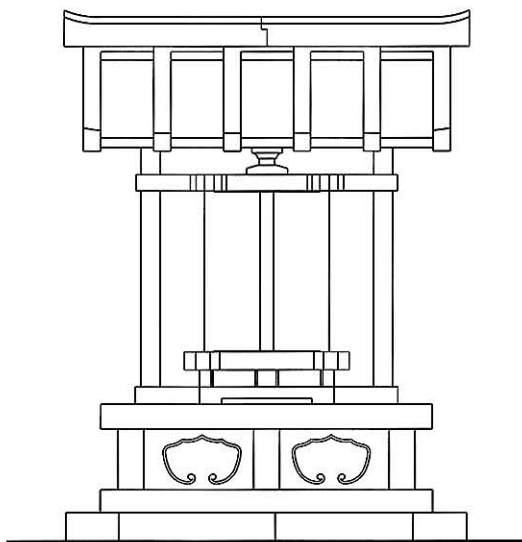
今回の修復工事では、江戸時代初期石造霊屋建築の構造手法や裝飾技法の詳細が明らかになり、近世の石造建造物を研究する上で貴

重な資料が得られた。

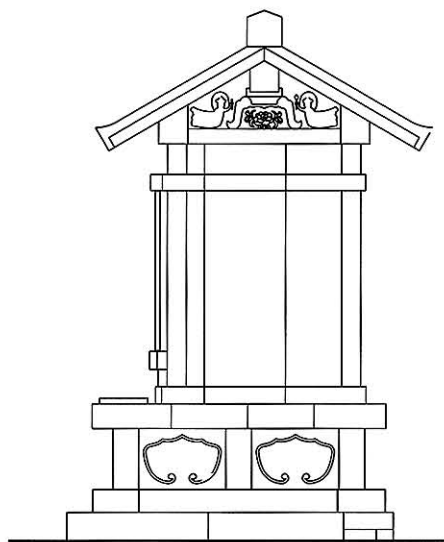
最後に、この蓮乗院霊屋は未指定文化財であるにも関わらず、文化財に準じる精緻な修復工事と、工事に伴う諸調査がこのように実施できたのは、所有者である本満寺ご住職並びに責任役員の方々の文化財に対するご理解とご協力に依るものであり、ここに記して謝意を表する次第である。

#### 付記

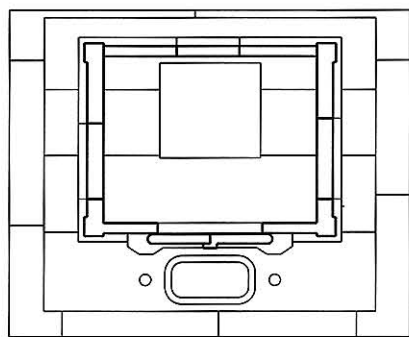
- 一 掲載写真は、工事施工者である(株)さわの道玄から提供を受けた。
- 二 掲載図面は、前記同様、(株)さわの道玄から提供を受けた修理前図面を基に、竣工実測調査を行い修正を加え製作した。実測及び作図は野村光広氏の協力を得た。
- 三 彩色調査においては、名古屋市立大学芸術工学部廣川美子教授の協力を得て蛍光X線分析を実施し、仏像彫刻部に金や朱の彩色等が施されていることが確認できた。



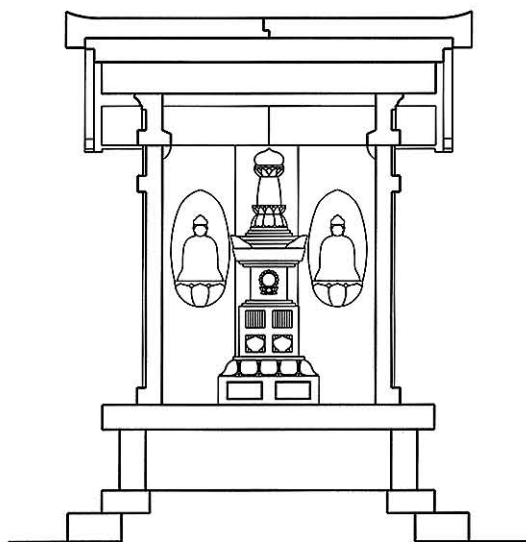
正面図



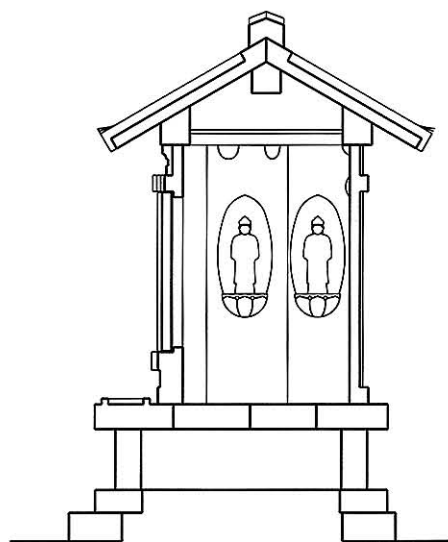
側面図



平面図



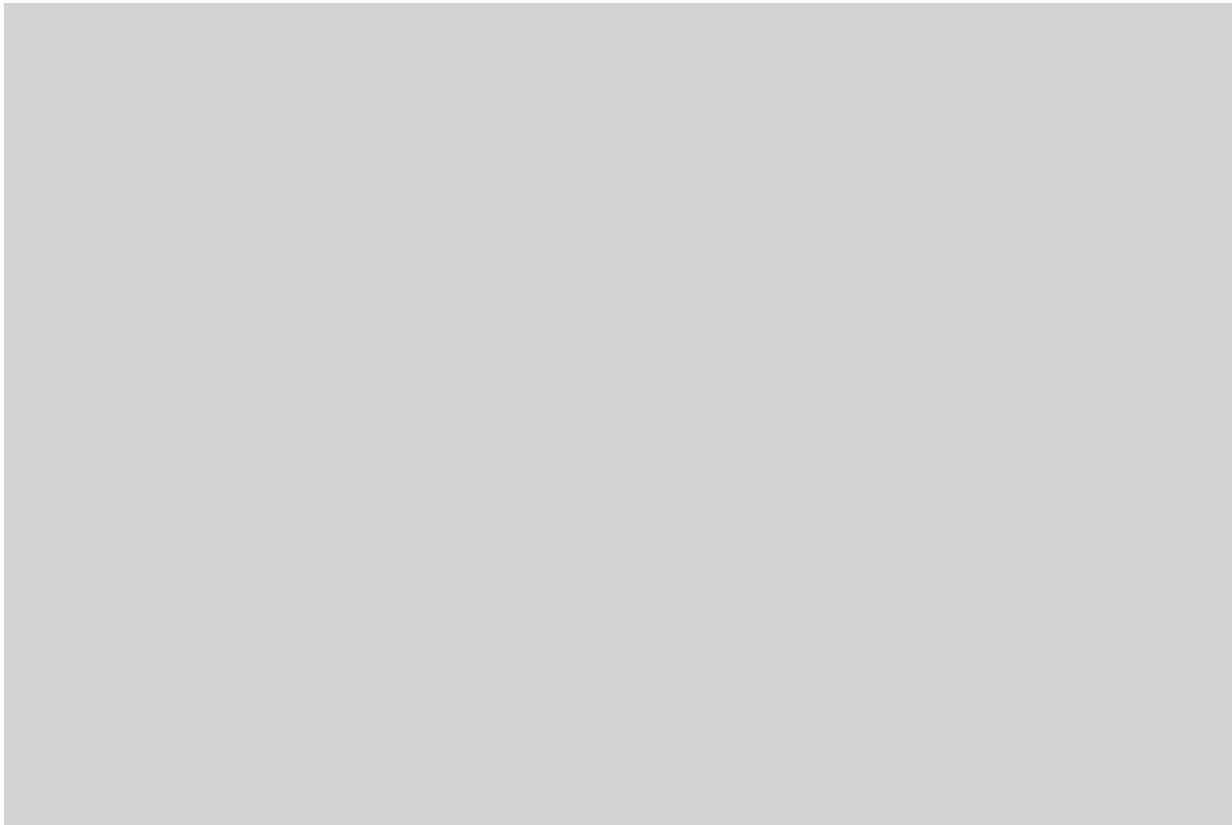
桁行断面図



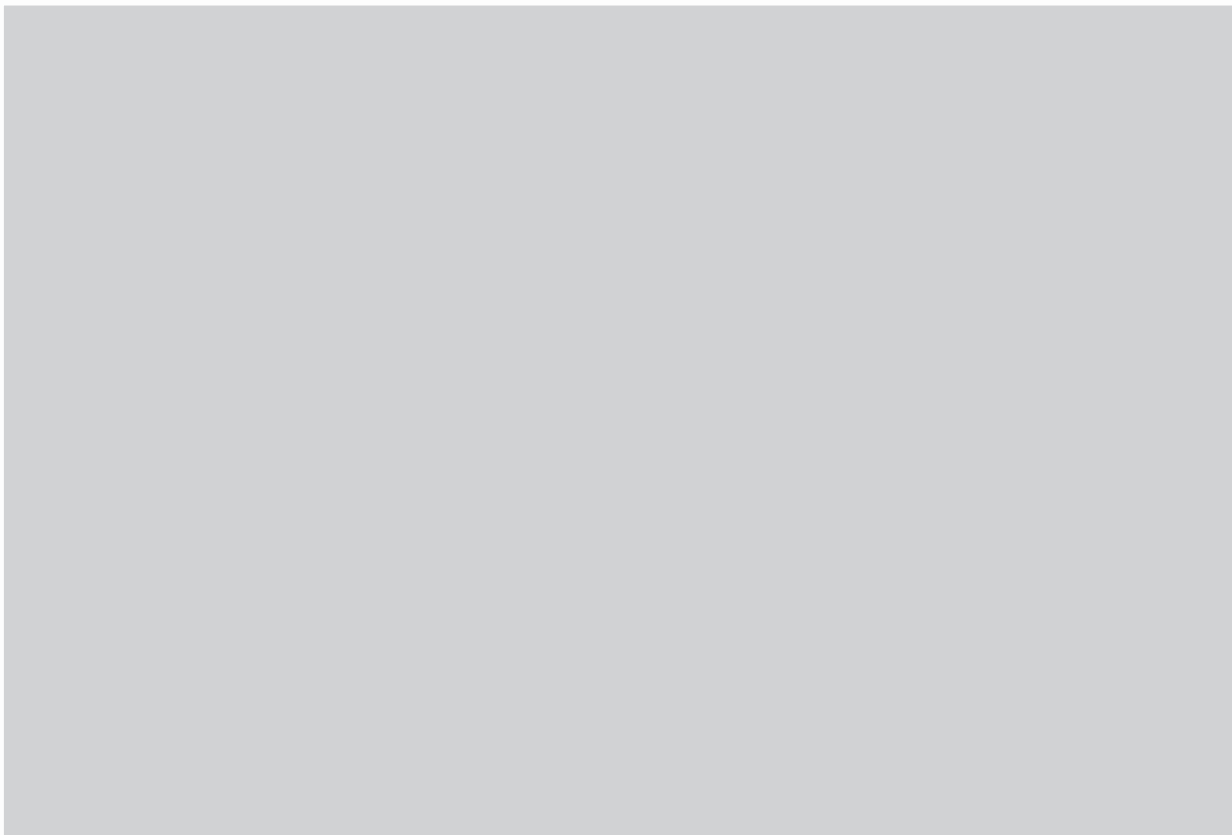
梁間断面図



附編・挿図1 蓮乗院霊屋実測図 (S=1:40)



附編・挿図2 屋根破損部材修復状況  
地表に落下した部材等を収集し、残存部材と照合しながら当初の形に繋ぎ合わせる作業を行った

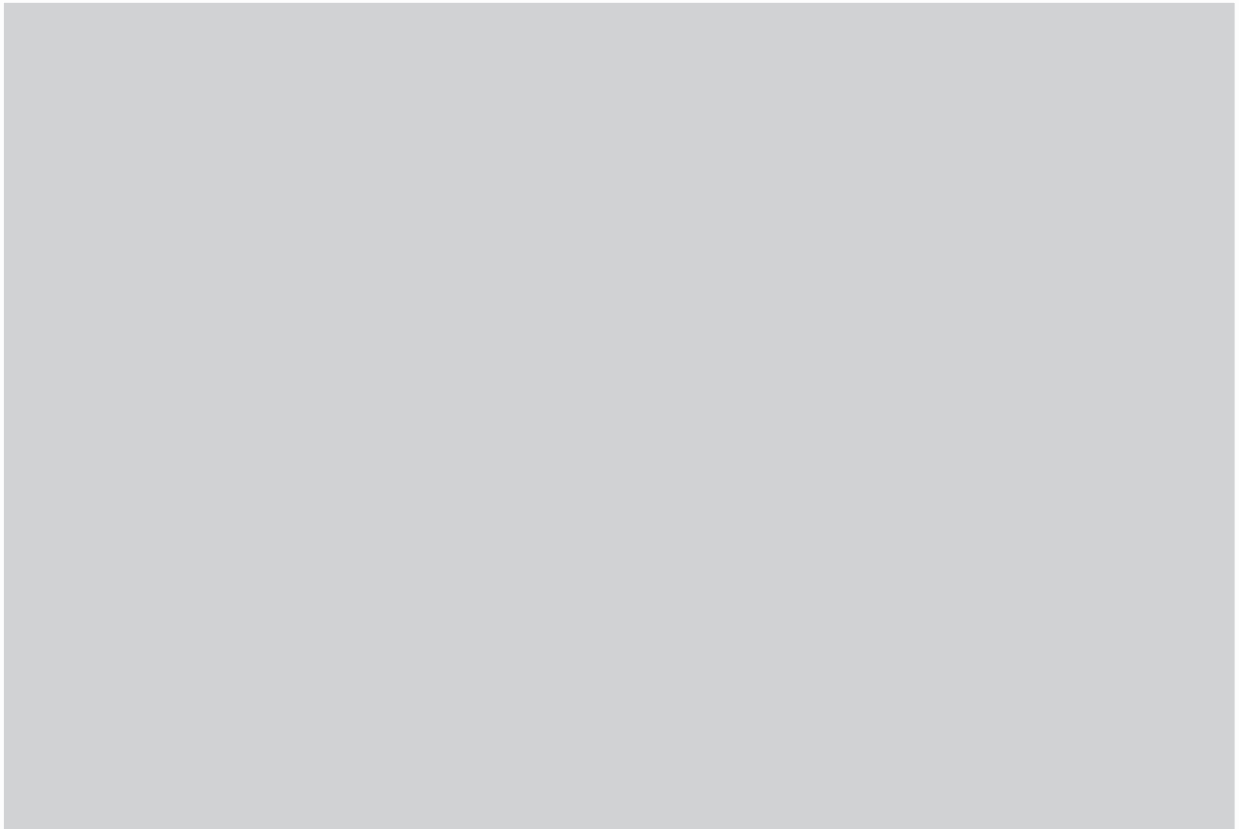


附編・挿図3 蓮乗院霊屋妻壁の詳細  
中央の墓股や両脇天女の浮彫をはじめ、妻壁全体に亘って彩色が施されていた



附編・挿図4 修復前全景

屋根背面は崩れて失われているなど破損が甚だしい。また劣化した基壇周辺には欠損した破片が散乱している



附編・挿図5 解体移築工事竣工全景